ひろしま自然保育Ⅰ型認証園

森のようちえん まめとっこ

自然保育推進事業活動報告書

まめとっこの2022年度

認可外保育施設として届出をして1年。安佐南区大塚地区にお借りしている築約100年の園舎を中心とした大塚・伴地区の森で、季節や天候・子どもたちの姿に合わせてフィールドを選びながら活動してきました。

新しいフィールドをお借りするようにもなって、子どもたちの経験の幅がまた広がりました。そんな1年間の様子を報告します。

フィールド整備（環境構成）

認可外保育施設として再出発するにあたって園舎とした築約100年の古民家周辺の環境を、今年度も手をかけて整備してきました。また、菜園を借りるようになったり、地域の団体が管理されているフィールドにも時々行かせていただいたりするようになりました。

地域で居場所づくりをされていたからハンモックを譲り受け裏山に設置しました。子どもの発達を後押ししてくれています。設置にあたっては木の切り株など子どもが転落した際に怪我につながりそうなものを撤去する作業を行いました。

大人が森の手入れをしている様子を見て、子どもも自らやりたい！と動き始めました。動線や視界を遮ったり足が引っかかったりしそうな雑木をのこぎりで切り、整備しました。切った木は遊びに活用しました。

新しくお借りするようになったフィールド。簡易トイレを持ち込み環境を汚さないようにしています。自然の沢、広葉樹の雑木林、展望台などがあって楽しい場所です。

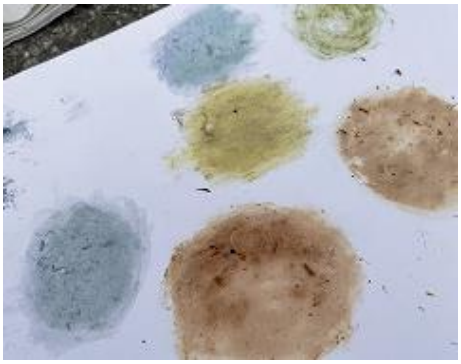
園舎から歩ける距離に菜園を借りました。子どもたちとホームセンターで苗や種を選んで植え付け、ミニトマト・きゅうり・レタスなどを収穫し自家製味噌をつけて食べたりしました。

身近な動植物と遊ぶ、つきあう（遊びの事例）

まめとっこは、「仲間・自然・いのちとの関わりを通して、しなやかに強く育つ」を理念のひとつとして掲げています。2022年度も遊びの中で身近な動植物と関わる場面がたくさんありました。

裏山で採れたタケノコを抱っこする、においをかぐ、皮をむいてみる。七輪で火を熾して茹で、昼食でいただきました。

園舎の周りでヨモギの新芽を摘んで、茹でてすりつぶしてヨモギ団子に。新型コロナ感染防止でビニール袋を活用しました。



野の色を使ってお絵かき。身近に生えている草花を画用紙にこすりつけたら、こんなにたくさんの色に出逢えました。入園したての子がようちえんに慣れるための時期に、安心できる遊びとして取り入れました。

裏山から竹を切り出し節を取り除いて流しそうめんをしました。流し台づくりも工夫と遊びに満ちています。

生き物との出逢いも子どもたちにとって心躍るものです。生き物好きな男の子、自分の指をわざと沢ガニに挟ませています。森の中の砂防ダムでは、オニヤンマの大きなヤゴを見つけたり、モリアオガエルのたまごからおたまじゃくしが池に落ちる瞬間にみんなで立ち会うことができました。他にもメダカを素手でつかまえたり、カナヘビを息を殺して狙ったり、チョウを追いかけたり。

まめとっこのミッションのひとつが「広島の森での活動を通して、ふるさとと自然を愛し大切にする心と態度を育む」こと。自分のいのちが多様ないのちとともに共生していることを肌感覚で原体験に刻み込み、まめとっこでの経験を土台として今後の人生を生きていってほしいと願いながら保育を展開しています。

裏山のビワの葉で草木染め（遊びの事例）

まめとっこでは毎年、年中の進級制作・年長の卒園制作で草木染めを行っています。これまでセイタカアワダチソウ、玉ねぎなどを材料としてきましたが、今年は園舎の裏山にあるビワの葉で草木染めをすることになりました。

まずはビワの葉の採取から。高いところにあるので、高枝切りばさみを使って少しずつ採取します。小さな子どもにとって高枝切りばさみは扱いにくいですが、あきらめずに何度も工夫して、必要な量のビワの葉が採取できました。

採取してきたビワを枝から外し、さらにはさみや手で細かく切ります。毛が生えていてごわごわしていて、だけどいいにおいがして。不思議な植物です。子どもたちと草木染めの工程について相談し、このあといつ何の手順を進めるか決めました。そして日を改めて布を呉汁処理。さらにビワの葉を煮出し始めました。呉汁処理をして乾いた布は家に持ち帰り、お母さんと一緒に輪ゴムや割りばしで模様をつけてきました。

草木染めの工程3日目。いよいよ草木染め本番です。布をさっと水で濡らして絞ってから、前回から煮出している染液にとぷんと浸けます。しばらく煮染めしていくとオレンジ色が濃くなってきました。ミョウバンを溶かして媒染液をつくる仕事も子どもたちがやってくれました。好奇心旺盛に、自分事として草木染めを進めていきます。染液で煮染め、媒染を繰り返し、最後は水洗いしてから輪ゴムなどを外します。色味は同じだけど1枚1枚全部違う、個性的な布が染め上がりました。
年中さんはこの布をお弁当包みに、年長さんはこの布を自分で縫い合わせて小学校で使う図書バッグをつくりました。

大人の学び合い~大人の森のようちえん体験WS、リスクマネジメント~（自然保育を展開するにあたっての工夫）

まめとっこは、何かができるようになることではなく、一人ひとりがその人らしいペースでその人らしくいのちを輝かせて育つことを大切にしたいと考えています。それを支えるのが「信じる・待つ・見守る」保育です。だれかが促すタイミングではなくて、一人ひとりの子がその子のタイミングでその子の興味・関心・意欲が向かう遊び（主体的な遊び）から育つのを信じて待ちます。

…と言葉で書くのは簡単ですが、実際に信じる・待つ・見守る保育を実践するのはとても難しい。個性豊かな子どもたちが、小さいながらもまめとっこという社会（集団）に属しているわけで、安全管理上ある程度はまとまってもらう必要もあるからです。そして、見守る大人も一人ひとり違います。育ってきた環境も過程も、細かな部分での価値観も。子どもの姿を見守ると言いながらも、大人の価値観がついつい出てしまって、いらぬお節介を焼いてしまいたくなったりもします。

まめとっこは共同保育で保護者にも保育に関わってもらっているので、保護者とも保育観・子ども観・安全管理上の意識を共有することが大切です。今年度は4月に大人の森のようちえん体験ワークショップを行いました。

子どもたちが園舎に向かうまでのいつもの道と園舎の裏山で、森のようちえん体験をしてもらいました。でもただ遊ぶのではなく、信じる・待つ・見守る保育についての理解が深まり、なおかつ森を楽しめるようになるためのワークを盛り込んで実施しました。ひとつめのワークは「食べられる草、暮らしに利用できる草を見つけながらさんぽしよう」というもの。ゆっくりゆっくり歩きながら園舎に到着すると、それぞれが摘んできたものを見せ合います。同じテーマを持って同じ道を歩いても、一人ひとり見つけてきたものが違いました。そのあと感想を話し合いましたが、とてもおもしろい気づきにあふれていました。

そのあとは裏山で思いっきり遊びます！…が、ここでもワーク。保護者を半分に分けて、一方のグループには内緒で指令を与えました。その指令に従いながら遊びます。そうすると…。遊んでいる子どもを見守るときの適切な距離感が見えてくるのです。ここでの気づきもとてもおもしろいものでした。

最後はワークを忘れて思いっきり遊んでもらいましたが、不思議なことに一人ひとり別の場所で別の遊びに夢中になっています。大人は子どもには「一緒に仲良く遊ぶ」を期待しがちですが、「夢中になって心地よく遊ぶ」は必ずしも人と一緒じゃないんですね。これも大きな気づきでした。

研修受講状況

●救急講習（3回）

●MORIWARAオンラインセミナー（座学・現地研修）

●森のようちえん全国交流フォーラム at 富士山

●森のようちえん全国ネットワーク安全講座専門講習会

●こども学セミナー 2022、こども学セミナー 2022 ぷらす

●ひろしま自然保育推進交流会、安全管理研修会

●松居和氏×浅井智子氏対談ライブ「You are Mother~子育てを『地獄』と思う母たち~」

●赤十字幼児安全法支援員養成講習　など